

英語の先生の勉強方法
生徒を英語好きにさせるために

開倫塾
塾長 林 明夫

1. はじめに

世の中に「先生」と呼ばれる人は数知れないが、「先生」としてどのような勉強方法をとるかで生徒の運命も決まってしまうので、今回は、「英語の先生としての勉強方法」をお話したい。

* 学生時代にどんな先生に出会ったかで、人生に自信が出たり、困難な事態に出会った時に勇気が出たりする。私自身は、山辺中学校時代の担任だった岡田忠治先生から、「ブルドック魂」を教わったのが、とても有難かった。どんなことがあってもブルドックのように食いついたら離さないつもりで何にでも取り組むようにとの教えだったようだ。「先生」と呼ばれる人は、平常の授業の他に、折りにふれて生徒の人生のためになる話をしてあげることが大事だ。ただし、先生の本業は授業で自分の担当する科目を徹底的に教え、自分でお預かりした時と、ある一定期間教えた時と比べ格段と学力を身につけさせて、はじめて仕事をしたことになる。他のどのような仕事とも同じだが、結果を出してはじめて成果としての報酬がいただけるものだ。その「先生」に教わってその科目の学力が教わる前と比べて格段とついていなかったら、報酬をいただける立場にはないと言える。何年も勉強しても英語が全然ダメだとよく言われるが、英語の「先生」がしっかり教えればこのようなことはないはずであるので、今回は、このテーマを取り上げる次第である。

2. 英語の「先生」は何をどう勉強したらよいか

「教材をまずは完全に理解」すべきである。テキストとして定められたものを一語一句ゆるがしにしないで確実に理解すべきだ。不確かなところがあれば、その学年の学生が使用するレベルの参考書や辞書で調べること。大学や大学院のとき使ったものでは余りにもレベルが高く、教えるときには余り役に立たない。小学生や中学生、高校生用の参考書や辞書の最新版のほうが小中高生用の説明さがしとしては、はるかによい。学生用のそれらを持っていない先生が多いが、武士の刀にあたるものなので必ず購入すべきだ。持っていないでは済まされない。

「教材の文章や説明が口をついて出るまでに暗記」することが第二。テキストの本文だけでも何も見ないで言えるまでになること。そのためにはテキストを大声で音読することが最も手取り早い。同じ授業を何回かして、その結果数回目の授業でようやく本文の一部をうっすら覚えるのでは生徒にも劣る。(四つや五つの子は一発で覚えます)。

できるだけ「正確な発音・発声」で日本語も、英語も言えるようにすること。おなかから声を出す「腹式呼吸」をできるように訓練すること。語尾は明確に。「あの」「その」「ええと」等のあいまいなつなぎ言葉をできるだけ少なくすること。「あの」「その」「ええと」が多いのは、言うべき内容が予め決まっていなため。伝えるべき内容を事前にすべて書き出し、1時間分暗記をし、リハーサ

ルをやってみることが、「あの」「その」「ええと」を少なくする対策だ。ぶっつけ本番では、あいまいな表現やつなぎ言葉が多く、聴き手が耳障りな言葉に注意を奪われて迫力ある授業ができない。

「英語の発音をみがく」ためには、まず「発音記号が正確に書ける」までにすべきだ。今日教える本文をまず発音記号で書いてみよう。次にテキストや辞書を見ながら赤ペンで発音記号の添削をしてみる。更に、もう一度何も見ないで本文を発音記号だけで書いてみる。このようにして、発音記号だけで、テキストのこれから教える本文だけでも正確に書けるまでにすることができる。

ゆっくり、ていねいに「発音記号通りに読む」練習をすることが、英語の先生として発音を正確にするために大切だ。はじめはゆっくり、だんだんスピードを上げてナチュラルスピードにまでも)っていくこと。

* 発音記号にできるだけ忠実に発音できるまでになることとナチュラルスピードで発音できるまでになることが、発音の悪い先生に当たったと言われなかったための対策だ。いくら発音が良くなっても、スピードがないとアメリカに行っても通じにくい。

発音「テープやラボ」は最大限活用すること。教科書別に数多くのヒアリングテープや発音テープが販売されている。お金をおしまず自分で購入して、テープがすり切れるまでテープを聴き、何も見ないでくり返すことが大事。 の通りやって発音記号が正確に書け、正確に発音記号通り発音できるようになり、発音テープがすり切れるまでネイティブ・スピーカー(英語を母国語とする人)のあとにつき発音の練習をするだけで、今まで全くこのようなことをしないで生徒を教えてきた先生にとっては、有益と思う。

ラジオやテレビの「英語の番組」を最低でも一本はビデオやテープにとって視聴すること。ヒアリングテープのあるものは毎月自分のお金で購入すること。TV 番組もテープに取り車の中で聴きながら発音練習をすると、更に発音がよくなり、生徒に喜ばれる。

「英語の歌」を覚え、何も見ないで歌えるようにするとよい。イエスタデイだけでは余りにもさみしいので一月に1曲くらいは歌えるようにして持ち歌を10曲くらいつくり、授業中に生徒と一緒に歌うようにすれば、生徒は少しずつ英語好きになることがある。

自分の「授業をテープに取り」自分で聴いて、わかりにくいところや、直すべきところを捜し、次回はそれらを直すようにするとよい。

「英語で日記を書く」ことは、英語の先生にとって必ずやるべきことのひとつと確信する。自由英作文を指導することが今後必要となるが、先生が毎日書いていないでは生徒の前に立てない。ワープロに一日1回は向かって、ある一定以上の長さの日記を英語で自由に書く訓練を自らに課すべきだ。

「黒板の文字」や、英習字の下手な先生は生徒に尊敬されないどころか相手にされない。教室の後方から見てうっとりするほど上手な文字が書けない先生は、まず中学1年生用のペンマンシップを10冊ほどていねいにやり抜くこと。筆記体とブロック体で英文の文字が生徒をうっとりさ

せるくらい上手に書けるようになったら、黒板に今日教えるところを書き、教室の後方からながめることを1年間続けてみよう。必ず黒板の使い方が上手になる。

英語の先生なのに、「英字新聞」をとっていない人が多い。高校生用のアサヒ・ウィークリーでもよいから毎週読むとよい。できれば、アサヒ・イブニングニュースや、デイリー・ヨミウリや、ジャパン・タイムズなど毎日読むべきだ。タイムやニューズウィーク、エコノミストなどの週刊雑誌も一つは取るべきだ。シドニー・シェルダンや自分の「好きな作家の新刊本」が出たら買って一週間くらいの間読んでしまう元気が欲しい。「二か国語放送」のTVを入れて、映画は英語だけで見て欲しい。お金をため込むことも大切だが、「英語の通じる外国」にこの円高を活用してせっせと出掛け、使える英語をマスターして欲しい。

「英語の教え方、英語の勉強の仕方の本」を1ヵ月に各々1冊ずつ以上は読み、自分の教え方を向上させると同時に、生徒の自己学習能力を育てるための基礎知識を身につけて欲しい。

「英語の授業を英語だけで」展開する努力をして欲しい。可能であれば、おそれることなくどんどん実際にやってみて欲しい。

「国際理解教育」や「開発教育」についての理解を深め、自分の授業の中でやってみて欲しい。「国際理解教育学会」や「開発教育協議会」などにも入会して、積極的に活動して欲しい。

3. おわりに

英語好きの生徒は、英語好きの先生から生まれる。職業としての英語の先生はまず自分自身が英語大好き先生になり切り、それを生徒に伝えることにある。1ドル75円まで、いや50円まで進むとさえ伝えられる円高の中で、日本人が生きる道は英語を使って世界を渡り合う以外にない。英語の先生の役割の今日ほど大きいときはない。頑張ってください。